416
94

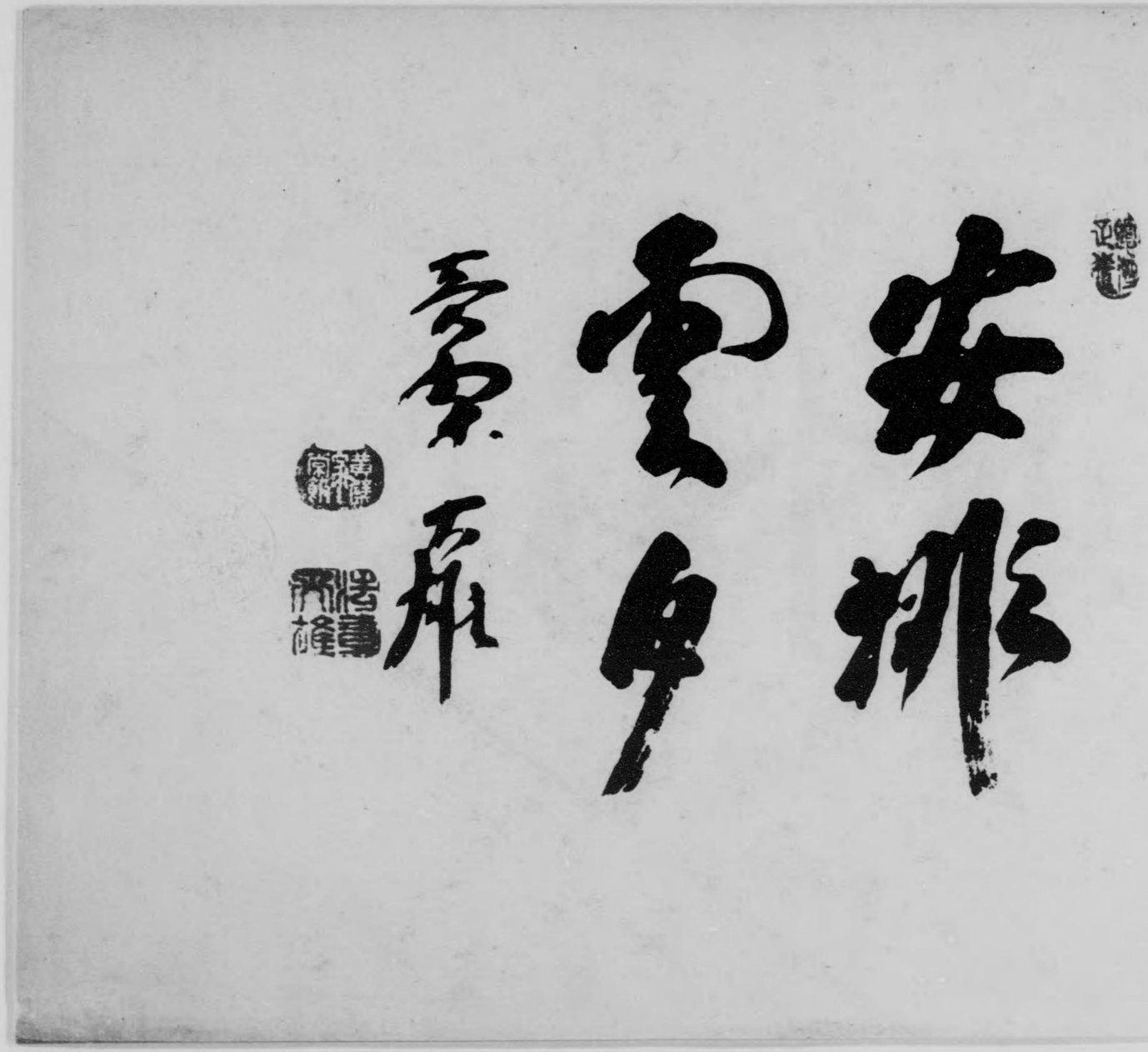
光風蓋宇

附 芙蕖深秉史

福濟現董三滿寅道編

大正
13. 6. 28
内交

416-94



和中
樹
梅
春
子

光風蓋宇序

趙老庭前之柏也就誰對其森々耶。
濟公嶺畔之松也依誰望其欝々耶。
是斯三百星霜以來之堂宇。原係開山蘊謙禪師之創立
有時則爲刹々之耀々
有時則爲塵々之漠々
天龍遁去野狐偶窺而
象王交謝狗子空眠矣
至鹿苑驚山
無瞿曇須達
也奈無人能辨刹與塵乎爰有開法木菴第三十一世實道行和尙焉。
象行獅吼之閑暇。
乃剖蠹腹于過古
而獲龍髓于現季
一卷名曰光風蓋宇本迹有無之眞義。罔羅靡孑遺也嗚呼。元來。佛法
無多子。自非其洗心于曹谿之第一流者安得樹立此玄功乎頌曰
毒語錯爲全玉文。鬼神千載費驚聞。
木人曾自停杯渡。猶有天龍住紫雲。

大正甲子歲立春大吉朝

桑門外漢　翰山

本帖編輯に就て

當山は、大約三百年前長崎在留支那泉漳州附近出身商人等の菩提寺として寛永五年支那泉州の僧覺悔禪師渡來現在の地を擇むて精舍を興し、越て慶安二年檀首潁川藤左衛門等の請に應じ、温陵紫雲山開元寺の住持蘊謙戒琬禪師來て左右を拓き、圓通殿及山門其の他の諸堂を構へ、重興開山となり、號して分紫山福濟禪寺とせしに始まる。

大正十一年は、時恰も開山蘊謙禪師仙化後二百五十年正當なりしも、草創以來年既に久しく殿宇の頽破甚大にして、入山の日尚ほ淺き小衲直下に之を決する能はず、然りと雖も乏を顧みず當山第三十一世に承けたるに、再び逢難き開祖の大遠諱たる一大瑞緣に遭遇し、嚴修し能はざるは慚愧に堪ねざるを思ひ、爾來遠近の有緣無緣に勸說拮据努力、幸に佛天の加護に浴し、當十二年四月に至り修の竣ふるを得以て開創三百年の紀念法要を兼ね大遠諱を營むの緣に逢へり茲に於て小衲謂らく、大遠諱たるや開山の卓越せる禪機と深遠なる玄風等を追憶し末世比丘が謹沐嚴修すべき所たり、依て千歲一遇たる其の大遠諱を營むに就ては、謹嚴且つ殷賑なる法筵を敷くに力むるも亦以て開山の眞前に奉じ併せて慈恩に酬ふるの一端たるべきを思ひ、開創前後に亘る渡來唐僧にして我が國禪風の振興を扶け、加之支那文化の輸入等に功績尠からざる、即開山在世の禪僚とも謂ふべき之等諸禪師の覺位を一堂に拜請し、併せて一瓣香を獻ずるの意義に於て其の肖像畫等をも展列せん事を企圖せり。

然るに此の大遠諱を嚴修せんとせる孟春四月を越へ、五月は恰も當市に於て日支聯絡航路の宿案成り、其の祝賀の盛典を行ふの運びに至れり、仍て已に遠諱の法筵と併催せんとせる肖像畫の展列たるや、一面より考ふれば過去三百年の往昔に於ける日支の親交を追想するの史料たるは言を俟たず、故に聊か兩國親善の一端ともならん事を期し、三百年後の今日に於ける上海聯絡航路に併祝するの意を以て、月を改め市催と期を同うし、之等の肖像墨蹟並に著書等の出陳を汎く諸方に請ひたるに、大本山を始めとし駿、尾、城、攝、播、長、等の各州及門司外九州一圓の諸刹其の他より此の舉を贊し、特に門外不出なる秘藏の出陳者多く、其の點數約五百を算し直ちに會場の狹隘を告ぐるに至り、茲に於

て隣刹聖福寺に請ひ第二會場に充て、以て一般善男善女の展覽に供せり。

然るに從來行はれざりし肖像畫の展覽が江湖の期待に副ひたる乎、觀者の數實に無量を迎へ、加るに該舉の如きは未だ曾て例を見ず宜しく編して畫帖と爲し汎く江湖に頒たば紀念たり史料たるべけんとの辭を忝うせり、小衲又意を留むること此處に薄しとせず、因て直ちに列中より拔萃書畫共に他に比少きものを選び以て編輯せり、然りと雖も其の收むる處未だ以て槃門の史料全悉を網羅したりと安んずることを得ざるは誠に遺憾とする所たり。

唯希くば日本文化に貢献尠からざる之等明末支那僧の功績が、逐次輸入する歐米新文化の爲め其の光輝漸次に曇遮さるゝの感あり、又累次積年逐ふて坊間に散佚し、或は徒に蠹魚の腹中を養ふの材に終らんとしつゝある之等珍重すべき肖像畫等が、編ずる處の本帖に依り其の命脈を保ち、加へて江湖の古を暖め、又次で史學研究等の資たるを得ば、其の法乳に命を養ふ小衲の光榮實に無邊とするところなり。

更に白す乏しきを以て小衲遠諱準備の傍ら展覽を敢てしたるは、實に尾州山本悅心、城州村瀨義勝、播州岩田默然、長州中井廣州の諸師及槃門の逸史たる門司の吉永雪堂、長崎市史編輯委員福田鶴城、同市皇典講究所講師丹羽翰山等の諸居士斡旋の勞を惜まざりしに因るものなるを敬謝し、殊に又遠諱後殘務の整理傍ら本帖の編輯を遂げ得るに到りたるは專ら雪堂、鶴城、翰山の三士が自己の本來を沒して其の完成に鼎援甚大なりしに歸因するものなることを、重ねて感佩九謝する處なり。

發刊に臨み聊か蕪辭を羅列し以て本帖編輯の經過を叙すと爾云。

大正十二年十一月上浣

分紫山房に於て

小住　三浦實道識

凡例

一、本帖の題名は當山大雄寶殿の懸額中木菴禪師の大筆光風蓋宇を襲用したる

凡例

一、本帖の題名は當山大雄寶殿の懸額中木菴禪師の大筆光風蓋宇を襲用したるものなり。

一、冒頭に支那黃檗、宇治黃檗の兩舊圖を附したるは日支兩檗關係を現さんとの意に依る。

一、後水尾法皇尊影の外和僧龍溪禪師の法像を掲げたるは黃檗の宗源に絶對關係を有するものなればなり。

一、法像の併列は概ね其渡來の順に依れり。

一、卷中法像以外の肖像は其の唐裝と和裝とを問はず總べて歸化人にして之等の數少きは出品多數なりしも原圖が保存の度を失しある爲め幾度かの技術を加へたるも撮影又は玻璃版に適合せず遺憾ながら適するもの四五のみを掲げたるによる。

一、寫眞解說中省畧せる處は卷末雪堂居士起稿にかゝる渡來史に就きて參照せられ度し。

附辭

本帖は大正十二年九月出版豫定の處同一日關東地方大震災の餘波を蒙り且つ內容の取捨撰擇寫眞を增加し其の面目を一變したる等の爲め尠からざる費用と時日とを費し遂に出版延期の止むなきに至りたるは遺憾に堪ゑず讀者幸に之を諒せられんことを

黄檗
史料
光風蓋宇
目次

黄檗史料

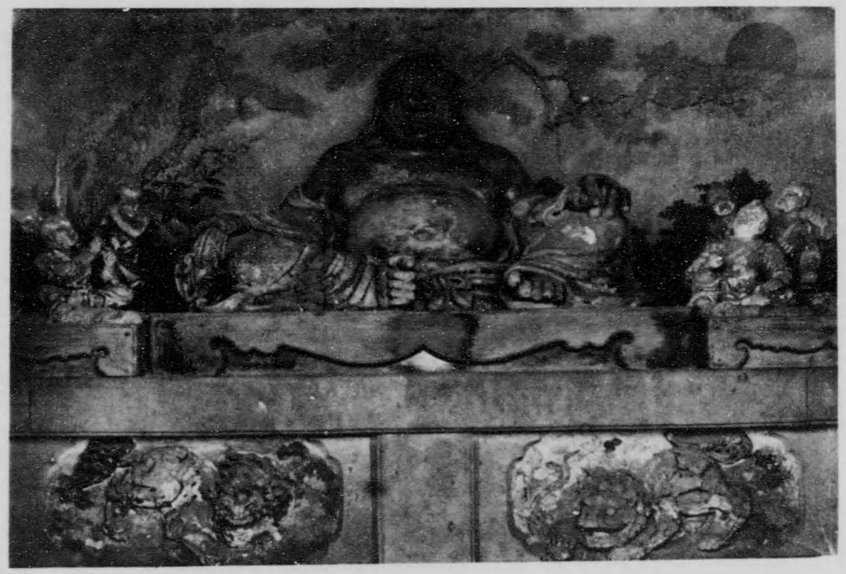
光風蓋宇

目次

一、護法堂之布袋像……一
一、支那黄檗山之古圖……二
一、隱元之書（額面）……三
一、宇治黄檗山之古圖……四
一、文政年頃之福濟寺古圖……五
一、現在之福濟寺全景……六
一、木菴之書（額面）……七
一、福濟寺山門……八
一、福濟寺大觀門……九
一、大觀門之石敢當……一〇
一、福濟寺青蓮堂……一一
一、青蓮堂之内部……一二
一、福濟寺大雄寶殿……一三
一、大雄寶殿之内部……一四
一、福濟寺書院大床及違棚壁畵……一五
一、書院杉戸沈南頻之畵（四枚）……一六
一、獨入けんべる著福濟寺記……一七
一、後水尾法皇御影……一八
一、龍溪禪師像……一九
一、龍溪禪師之隱元禪師請待書簡……二〇
一、隱元禪師返翰……二一
一、費隱禪師像……二二
一、費隱禪師書（二葉）……二三
一、默子禪師像……二五
一、默子禪師之眼鏡橋……二六
一、默子禪師之書……二七
一、無心禪師之書……二八
一、無心禪師像……二九
一、逸然禪師像……三〇
一、逸然禪師之達磨、寒山、拾得圖……三一
一、獨立禪師像……三二
一、獨立禪師遺偈……三三
一、澄一禪師像及書……三五
一、蘊謙禪師像……三六
一、蘊謙禪師之書……三七
一、蘊謙禪師遺偈……三八
一、道者禪師像……三九
一、道者禪師書（二葉）……四一
一、隱元禪師來朝到岸之圖……四二
一、御水尾法御宸翰……四三
一、隱元禪師像……四四
一、雲元天皇御宸翰……四五
一、隱元禪師像……四六
一、鄭彩隱元禪師に贈之書……四七
一、隱元禪師遺偈……四八
一、慧林禪師像……五一
一、無上禪師之書……五二
一、獨言禪師之書……五三
一、慧林禪師將軍菽政之賀偈……五四
一、獨湛禪師像……五六
一、獨湛禪師之書……五七
一、獨吼禪師自畵讃……五八
一、大眉禪師像……五九
一、大眉禪師之書……六〇
一、南源禪師之書……六一
一、南源禪師像……六二
一、木菴禪師像……六三
一、木菴禪師之書……六四
一、木菴禪師像……六五
一、木菴禪師之書……六六
一、獨湛禪師自畵讃……六七
一、雪機禪師之書……六八

一、慈岳禪師像……三〇
一、雪機禪師自畫讃
一、慈岳禪師之書
一、喝浪禪師像
一、即非禪師像……三一
一、即非禪師之書
一、即非禪師自畫讃
一、即非禪師像
一、千呆禪師像……三二
一、千呆禪師之巨鍋
一、若一禪師之書
一、曉堂禪師之書
一、高泉禪師像……三三
一、高禪泉師之書
一、柏岩禪師像
一、柏岩禪師自畫讃……三四
一、未發禪師之書
一、惟一禪師之書
一、悅峰禪師像
一、雷音禪師像……三五
一、旭如禪師像
一、呆堂禪師像
一、竺菴禪師像……三六
一、悅山禪師之書
一、柳澤保山居士書
一、悅山禪師像……三七
一、悅山禪師之書
一、悅山禪師遺偈
一、東澗禪師像……三八
一、東澗禪師之書
一、玉岡禪師之書
一、獨文禪師像……四九
一、獨文禪師遺偈
一、獨文禪師之書
一、喝浪禪師像……四〇
一、喝浪禪師之達磨圖
一、全巖禪師之書
一、全巖禪師像
一、大鵬禪師像……四一
一、大鵬禪師之畫
一、化霖禪師畫讃……四二
一、化霖禪師之書
一、鶴博禪師之書
一、雪堂禪師之書……四三
一、雪堂禪師之書
一、玉岡禪師之書
一、雪广禪師之書
一、雪广禪師像
一、大衡禪師像……四四
一、別光禪師之書
一、靈源禪師像及書
一、義勝禪師像……四五
一、伯珣禪師像
一、大成禪師師像
一、陳賢之觀音圖……四六
一、無得禪師之書
一、慧門禪師之書
一、清斯禪師之書……四七
一、天也禪師之書
一、慧門禪師之書
一、羅漢圖題及跋……四八
一、逸然之布袋圖……四九
一、秀石之布袋圖
一、秀石之壽老人圖
一、穎川藤左衛門居士像……五〇
一、俞惟和居士像
一、吳一官居士像……五一
一、魏之琰居士像
一、彭城宣義居士像
一、林道榮居士像……五二
一、林道榮居士之書
一、劉宣義居士之書
一、王心渠居士像……五三
一、敬義齋居士之書

一、喝浪禪師像 ……四〇
一、喝浪禪師之達磨圖
一、全巖禪師之書
一、劉宣義居士之書
一、王心湛居士像 ……五三
一、敬義齋居士之書



福濟寺護法堂ノ一佛
布袋和尚之大塑像

此像は今を溯ること約三百年前劉寛水十年佛工林高龍及癸眞君が長崎に於て作なる所の一大塑像なりと傳へ其手法巧妙にして豐富活氣の溢あり故に新道の製者に曰く諸種の塑像全國に少しとせず然ども此像を凌駕する底のもの他に比なを見ず宜しく國寶として保護すべゝなり云々と

支那黄檗山古圖

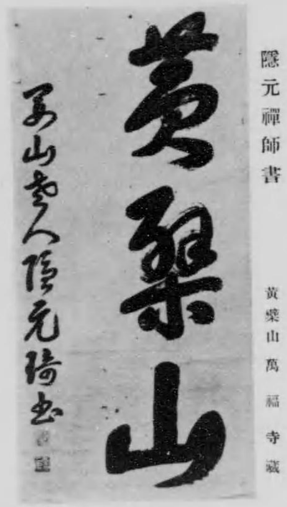
黄檗山　萬福寺藏

黄檗山は支那福建省福州府福清縣清遠里にあり、唐の正觀五年正幹禪師開創す、降て明の崇禎三年密雲悟禪師、同六年其嗣費隱容禪師相繼て住持す、同十年十一月隱元隆禪師入寺す。一時法弟耳信獨禪師に席を譲りしも幾くもなくして再住し永曆八年席を慧門活禪師に譲り日本に來朝す、此圖は禪師渡來の前年に成るものなり。

日本黄檗山古圖

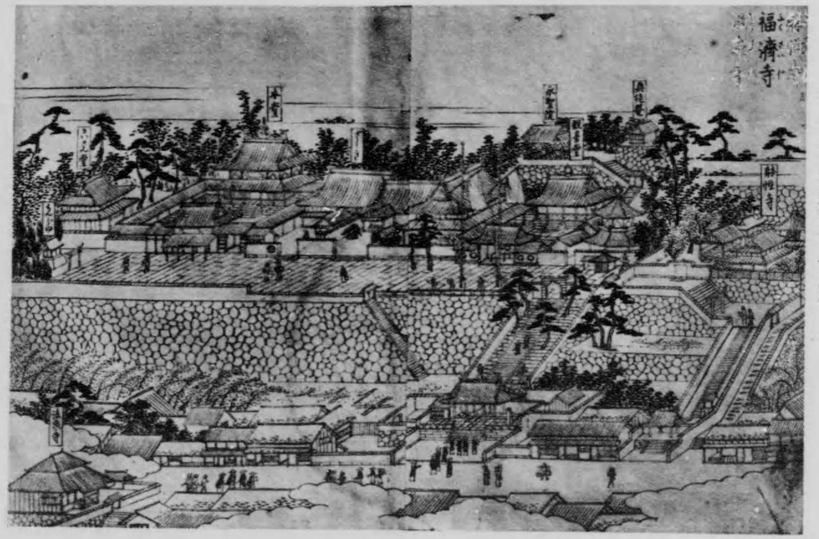
黄檗山萬福寺藏

黄檗山は山城國宇治郡五ヶ庄村にあり寛文元年隱元隆琦禪師開創す同三年正月將軍の令旨を承け觀國開堂す是より支那黄檗に對して新黄檗と稱す



隱元禪師書

黄檗山萬福寺藏



分紫山福濟寺古圖

長崎市役所藏（長崎名勝圖繪圖中より撮影）

分紫山福濟禪寺　全景

福濟寺は長崎市下筑後町にあり寛永五年支那國福建省泉州の人覺悔禪師開基す次で鎮讓禪師重興す、山門、青蓮堂（明治四十三年八月内務省指定保護建造物）大觀門（同上）同廻廊（同上）大雄寶殿（同上）護法堂（同上）同廻廊（同上）書院、庫裡、開山堂、鐘鼓樓、仙人堂等の建物あり。

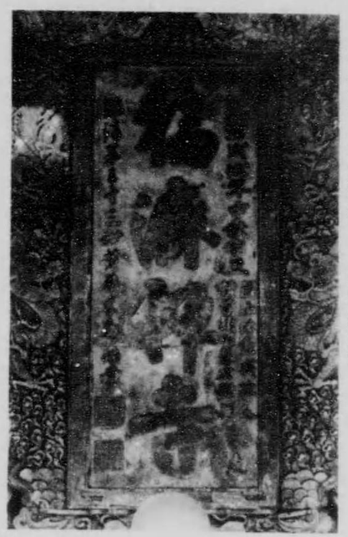
解　説

1、山　門
2、大觀門、同廻廊の一部
3、青蓮堂
4、書　院
5、庫　裡
6、鐘鼓樓
7、護法堂、同廻廊
8、大雄寶殿
9、開山堂

福濟寺山門

桁行參間、梁間參間、單層組物出組、軒二重垂木、入母屋造　千鳥破風、丹塗、屋根本尾葺（福濟建物調）萬治元年檀越、頴川藤左衛門藤謙禪師と謀り建立せるものにして爾來數度の修理を加へて今日に及びたるを大正十二年開山二百五十年大遠諱殿修祀念さし更に大修繕を施せり

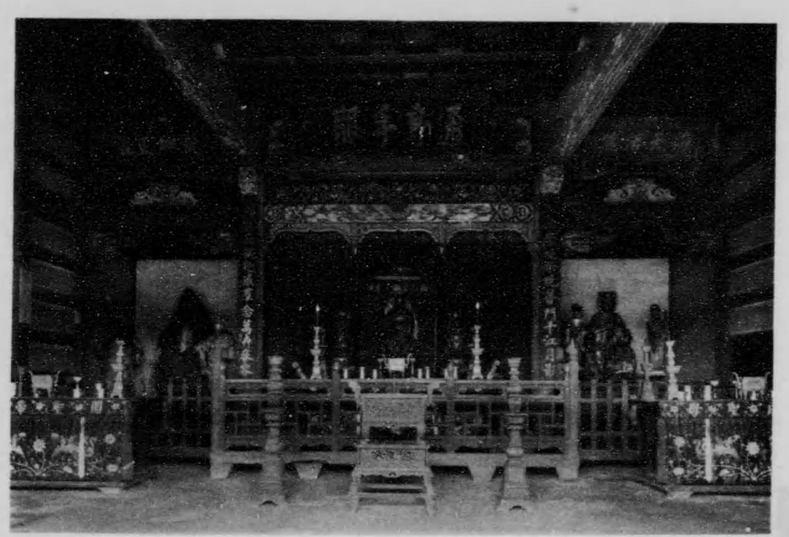
福濟寺山門懸額　木菴性瑫禪師筆



福濟寺大觀門ト石敢當（特別保護建造物）

青蓮堂前山海に面して建設せられある明朝式築造物にして兩側なる柱脚へ長方形の臺石上に置かれたる蹲踞狀石兩基あり花卉鉏毛を刻して巧妙を極む長崎圖誌並に長崎名稱圖繪に依れば該石を石敢當と稱し居れり

石敢當



福濟寺青蓮堂（特別保護建造物）

桁行五間、梁間五間、單層、組物、出組、向拜に船底天井あり、軒二重垂木、入母屋造り、千鳥破風、内部格天井、彫刻品總て彩色、内外共丹塗、屋根瓦葺、（福濟寺建物調）

青蓮堂一に觀音堂と稱す明暦元年の創建に係り爾來數度の修繕を加へて今日に至れり

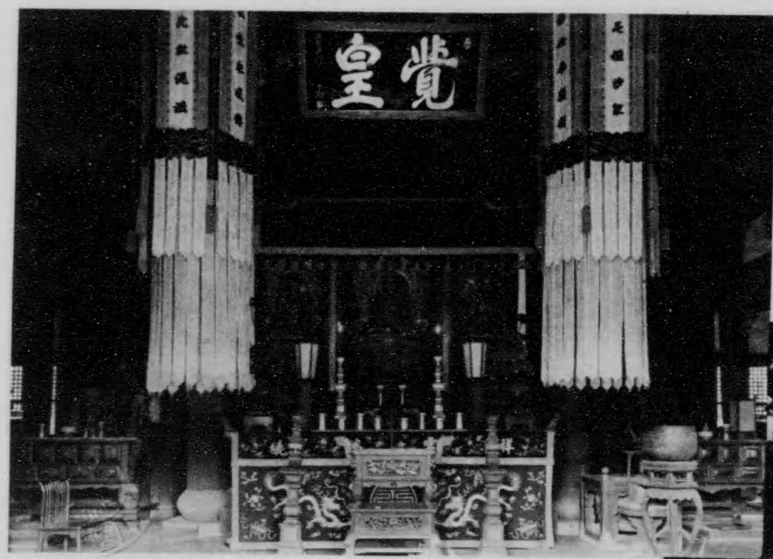
青蓮堂内部

正面壇上には觀世音菩薩、善財童子、龍女童駄天、毘沙門天な、左壇には天后聖母及侍女な、右壇には關帝及關平周倉な何れも安置しそれ〴〵通身手眼、海天海佛、乾坤正氣等の額な掲ぐ

福濟寺 大雄寶殿

（特別保護建造物）

桁行五間、梁間六間、二層造組物、階上二ツ斗階下なし向拝に船底天井あり軒上下共二重垂木、下軒野垂木より内部へ六寸勾配にして軒の垂木同様なるものを打登り、母屋を取設け重板打ちて内部の天井と致し其上に野桁を掛階合掌を取設け束を立て大屋根には母屋を取設け小屋組數通り屋根入母屋造、千鳥破風、内部は唐木の一尺角燻瓦敷内外共丹塗、彫刻品は彩色屋根本瓦葺（福濟寺建物調）明暦元年の創建に係り爾來數度の修理を加へ今日に至れり。

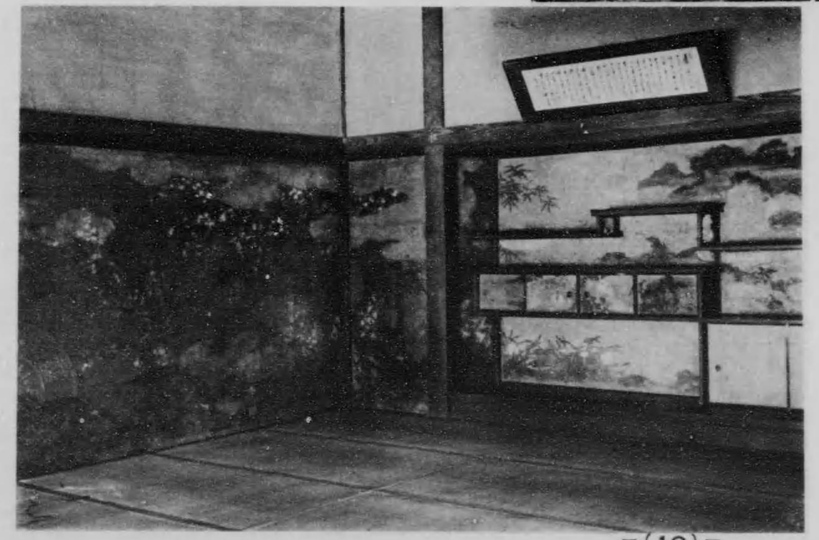


大雄寶殿内部

正面の壇上には釋迦牟尼世尊及文殊、普賢二菩薩を左壇には大權修理菩薩を右壇には達摩大師を各安置せり本尊前覺皇の額字は隱元禪師の筆なり

傳說に依れば本尊釋迦像は揭貢妃の念持佛にして明暦二年南海普陀山より寄贈する所、大權・達摩の兩像は寛永十年支那漳州の佛工林高龍、吳眞君が長崎にて彫刻せるものなりと云ふ。

右上貳間方の大床左下違棚等より
大襖四面に連らなる壁畫



福濟寺書院壁畫

書院堂に接して書院あり。木造本瓦葺重層屋根入母屋造にして西南に長崎港を俯瞰し眺望絶佳なり。壁畫は長崎の畫人小原慶山筆、山水松竹梅等を極彩色を以て畫きあり。

當書院は明暦元年の創建にして再来數度の修理を施し来りたるを今次開創三百年を記念し重修。該壁畫も亦併て改裝せり。

露光量違いの為重複撮影

書院所備の戸襖四枚あり片面には咲き盛れる牡丹花、蝶蝶猫兒及び二童を他の片面には咲き盛れる山野の秋色を湛ける梅彩色の菊花にして何れも沈南頻の筆とす。

福濟寺書院　戸襖

同上

福濟寺書院　戸襖

書院所備の戸襖四枚あり片面には咲き盛れる牡丹花、綿蝶猫兒及び二童を他の片面には咲き盛れる山野の秋色を謳ける極彩色の菊花にして何れも沈南蘋の筆さて

同上

下に掲げたる英文はケンペル著日本歴史第二巻の百四十八、百四十九頁の全面なり本文に唐寺の題下に南京寺、福濟寺（福州寺、崇福寺（福州寺）、寺の維持法隱元禪師の略歴、東渡の機縁、黄檗の創始、隱元の法力等を説けるものにて事實の相違せる點あれども大体は參考するに足る、文中支那寺は中々に富めるが故に福寺と呼ぶ或は隱元東渡に際し長崎附近の諸侯伯が禮儀を盡くして歓迎せり等頗る參考となるべき文字あれども餘白なきを以て譯文の記載は之を差控ふる事とせり。

THE HISTORY OF JAPAN

the name of Koofukusi, that is, the temple of settled riches.

Tsiaksjudira. 2. Tsiaksjudira, or Tsiansjudira, that is, the temple of the country of Aimos, whereby must be understood the Southern Provinces of the Empire of China. The Chinese, who inhabit the Island of Formosa, and are settled in other countries distant from China, belong to the same. There is a Matsusi or dependant convent under the direction of its Superior. It is one of the largest and best stock'd with Monks. Its other name is Fukusi, that is, the temple of riches.

Foksiudira. 3. Foksiudira, that is, the temple of the northern countrys, was founded, and is frequented by those Chinese, who come from the Northern parts of China. Its other name is Fuku Saisi, that is, the temple of riches and offerings.

Maintenance of the Monks. These convents were formerly attended by Chinese Priests only, and maintain'd at the sole expence of this nation. But since the shutting up of the Empire and the new strict regulations made with regard to the foreign trade, they suffer only two born Chinese to live in each of them. Their maintenance, as well as that of other temples of this foreign Budsdo worship, arises from the voluntary charitable contributions of their countrymen, as also from fees given them for prayers to be said, and offerings to be made, for the relief of departed souls. If the money got by these means be not sufficient to maintain them, a supply is expected from the Imperial bounty. The Superiors of these three Convents stand under the immediate disposition of a particulsr General of their own, who resides near Miaco, on the mountain Oobaku, and says, that he is the third successor on the Archiepiscopal See of Ingen, and consequently the head of all the Clergy of this foreign pagan eligion. The better to understand this, it will be necessary to insert the history of this Ingen.

History of Ingen. Ingen, was a native of China, where he succeeded upon the holy seat of Darma, the first Chinese Pope, and himself

the twenty e
and is still a
The love f
Convents m
them, a stro
self to pro
Empire of
thereof agai
the Christia
this Doctri
sufficiently silenc'd by that famous and unparallel'd persecution which arose in this Empire) prevail'd upon him to part with the high dignity and power, he was invested with, in favour of his Successor, and to come over into Japan, there to establish a sort of a Caliphat, or Archiepiscopal See of this Doctrine. He arriv'd in Japan in the year of Christ 1653, and was receiv'd with all imaginable respect. The Princes and Lords of several Provinces came to compliment him, clad in their Camisimo, or Garments of Ceremony. The Emperor offer'd him, for his residence, a mountain in the neighbourhood of the holy City of Miaco, which he call'd Obaku, by the name of his former papal residence in China. An incident, which happen'd soon after his arrival, contributed very much to forward his designs, and rais'd in several Inhabitants of this Empire an uncommon respect for his person, and a great opinion of his holiness. After a very great drought, the country people, his neighbours, desir'd him to say a Kitoo, or extraordinary solemn prayer, in order to obtain rain from heaven for their rice-fields. He answer'd, that it was not in his power to make rain, and that he could not assure them, that his Kitoo would obtain it. However, at their pressing instances, he promis'd to do his utmost. Accordingly he went up to the top of the mountain, and made his Kitoo. The next day there fell such profuse showers, that even the smaller bridges in the city of Miaco, were wash'd away, which made both the city and country believe, that his Kitoo had been rather too

元祿時代の長崎及び福濟寺

上圖は元祿三年出島阿蘭陀屋敷醫官として渡來せしエンゲルベルト・ケンペルの著日本歴史第二巻に收めたる當時の長崎地圖にて圖中向って左の下方の大きなる建物が福濟寺、左上方の鳥居の一部は諏訪神社一ノ鳥居、圖中、中央上部の大小の建物は何れも風頭山下に羅列せる各宗寺院なり。

露光量違いの為重複撮影

後水尾法皇御尊影

法皇御自讃

林丘寺宮光子内親王御筆

黄檗山松隠堂蔵

露光量違いの為重複撮影

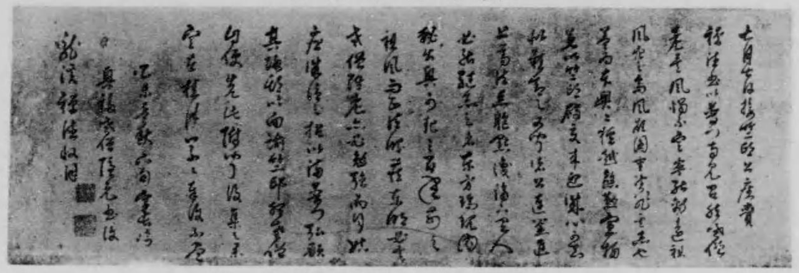
後水尾法皇御尊影　法皇御自讃　林丘寺宮光子内親王御寄　黄檗山松隠堂藏

萬松開山　龍谿性潛禪師像　同　禪師自題　畫者未詳

攝津　慶瑞寺藏

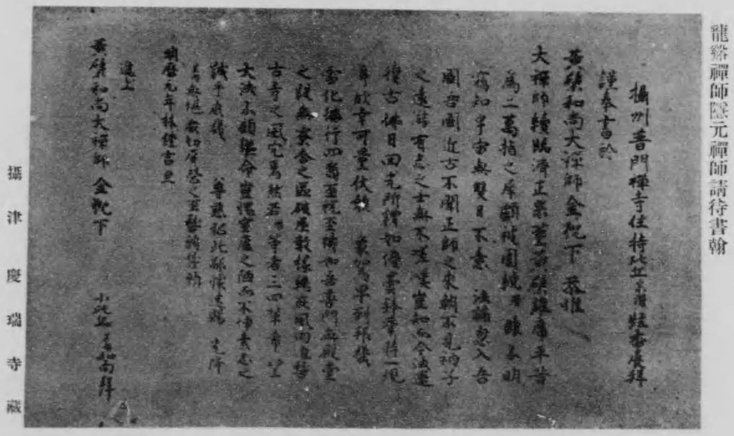
龍谿禪師は京都の人初め東寺に入りて密教を學び後禪門に入り業成り、妙心寺に出世す、明暦元年隱元禪師を攝津普門寺に請し後禪師を補けて黄檗山を開創す寛文九年後水尾法皇特に大宗正統禪師と賜ふ同十年八月化寿世壽六拾有九

隱元禪師返翰



攝津　慶瑞寺藏

龍谿禪師隱元禪師請待書翰



攝津　慶瑞寺藏

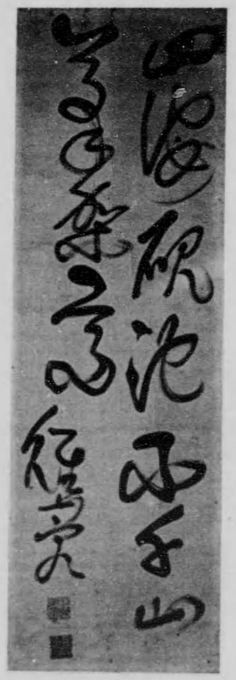
費隱通容禪師像　隱元禪師題讃　喜多元規讃

長崎　聖福寺蔵

費隱禪師は支那福建福州府福清縣江陰里の人、俗姓は何氏、出家して密雲禪師の法を嗣き黄檗の金粟天童徑山等の諸寺に歴住し、明末間出の大宗匠を以て目せられ、清の順治十八年三月化寸壽六拾九、隱元は實に其の長嗣なり

費隱禪師書

黄檗山　萬福寺蔵

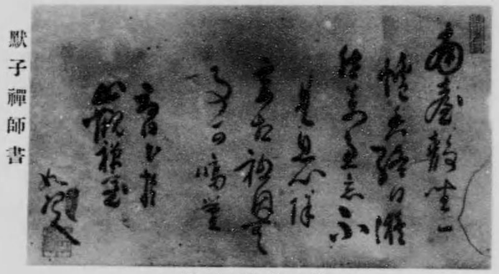


興福第二代　默子如定禪師像　竺菴禪師題讃　畫者未詳

長崎　興福寺藏

眼鏡橋

該橋は長崎市酒屋町と磨屋町との間に架する鹿の石造双圓巾貳間六合長さ拾貳間五合の橋にして寛永十一年默子如定の設計になりたるものなり我國に於ける明朝式石橋は之を以て嚆矢とし年を閲すること貳百九拾余年洪水氾濫に及ぶも未だ曾て流失せしことなし



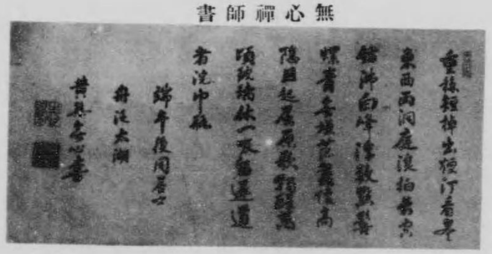
默子禪師書

肥前　普明寺藏

無心性覺禪師像　獨湛禪師賛　關谷禪師書

黄檗山　萬光院藏

無心禪師書



門司　吉永雪堂藏

逸然禪師書　長崎　森喜智朗藏

拾得像（右）　木菴識

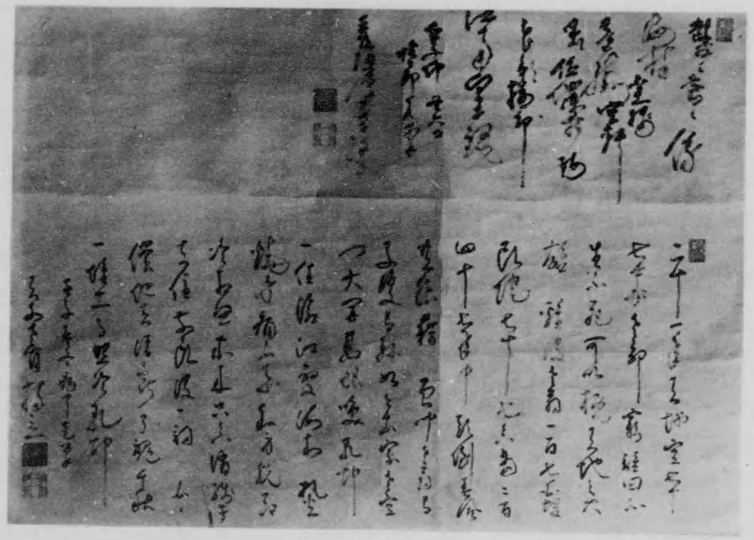
達磨像（中）　隱元識

寒山像（左）　卽非識

興福第三代　逸然性融禪師像　渡邊秀石畫　長崎　興福寺藏

獨立性易禪師像　同　禪師白瓶

吉多元規畫　門司　吉永雪堂藏



獨立禪師遺偈・病中偈　（合幅）

興福第四代

證一道空禪師像（左上）

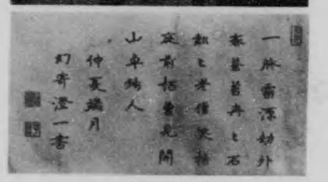
獨堪禪師賛　喜多元規畫

長崎　興福寺藏

黄檗山　萬福寺藏

證一禪師書（左下）

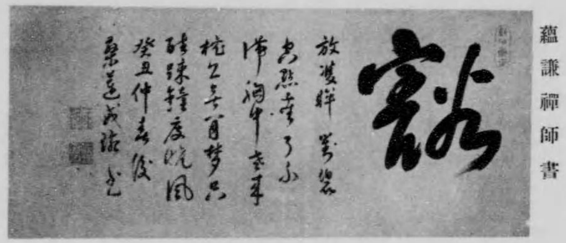
肥前　普明寺藏



福濟重興開山蘊謙戒琬禪師像

木菴禪師題讃　喜多元規書

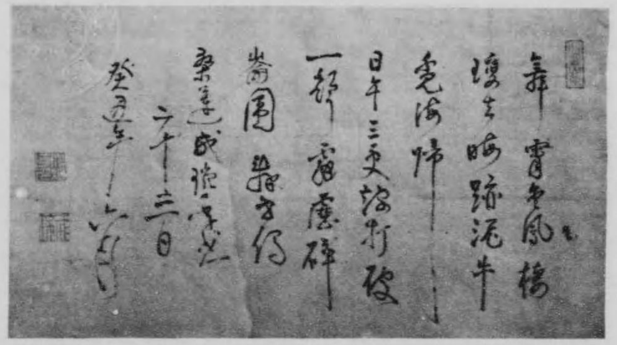
長崎　福濟寺藏



蘊謙禪師書

長崎　太田芳太郎藏

蘊謙禪師遺偈



長崎　福濟寺藏

興福重興　道者超元禪師像　（右）
同　禪師自賛　善馨書　播州　龍門寺藏

道者禪師書　（中）　門司　吉永雪堂藏

達磨　像　（左）
道者禪師題讃　書者未詳
長崎　河野醒古藏

露光量違いの為重複撮影

黄檗開山眞空大師隱元禪師來朝到岸（長崎）之圖

禪統紹禪師畫

駿河　法田寺藏

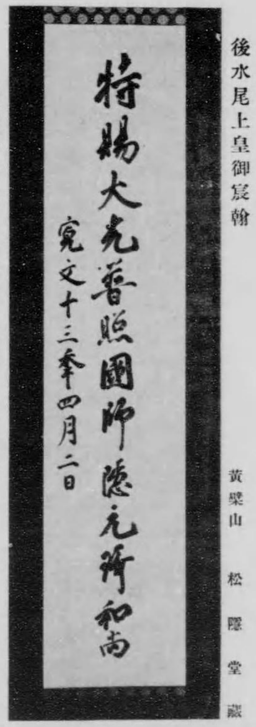
露光量違いの為重複撮影

黄檗開山萬安大師隱元禪師來朝到岸（長崎）之圖

狩統紹興師畫

駿河　法田寺蔵

後水尾上皇御宸翰

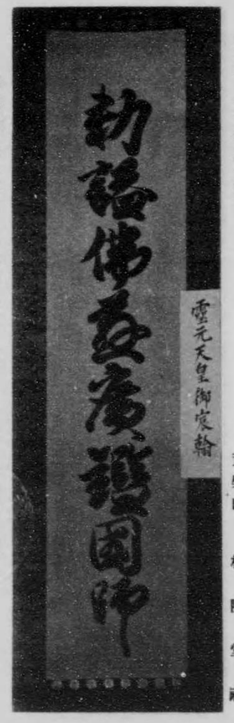


隱元禪師示寂の前一日　後水尾上皇の特賜せられたる徽號なり

黄檗山　松隱堂藏

眞空大師隱元禪師像　同　禪師自賛　喜多元規畫　黄檗山　慈福院藏

靈元上皇御宸翰

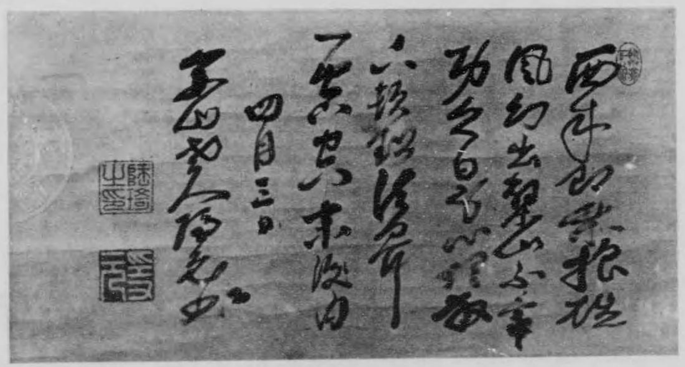


隱元禪師五十年祥忌に當り享保七年三月十三日　靈元上皇御加諡の徽號なり

黄檗山　松隱堂藏

建國公鄭彩贈隱元禪師書簡　黄檗山　松隱堂藏

明暦二年寄懐詩七律一首と共に贈り來る同年隱元次韻詩一首を返贈す



隱元禪師遺偈　黄檗山　松隱堂藏

隱元禪師像　同禪師自題　畫者未詳　豐州養德院藏

佛日開山　黄檗第三代　慧林性機禪師像

同　禪師自讃　德榮畫

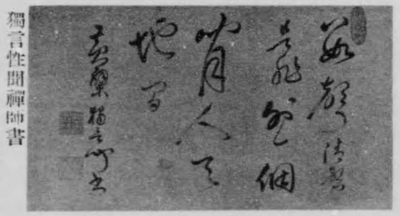
黄檗山　萬福寺藏

無上性覺禪師書

門司　吉永雪堂藏

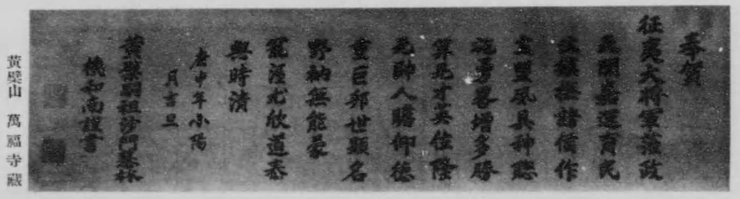
獨言性間禪師書

門司　吉永雪堂藏



慧林禪師書

延寶八年賀將軍薨政偈

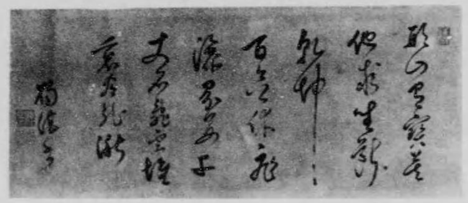


黄檗山　萬福寺藏

黄檗第四代　獨湛性瑩禪師像（右）

同　禪師自題　喜多元規書

長崎　興福寺藏



獨湛禪師書（中）

尾州　山本悅心藏

蘭之圖（左）

獨吼性獅禪師自畫讃

尾州　山本悅心藏

東林開山大眉性善禪師像　南源禪師賛　黄檗山東林院藏

大眉禪師書　長崎　太田芳太郎藏

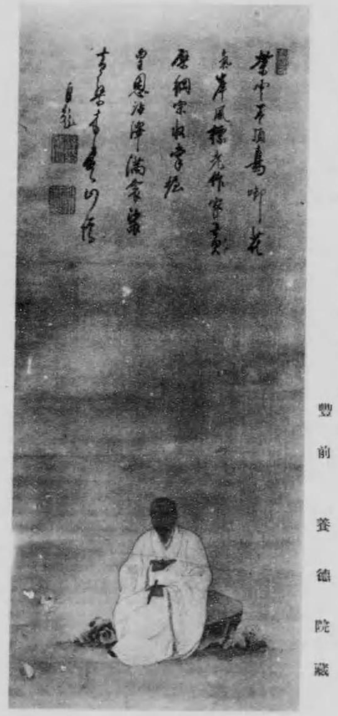
南源禪師書　尾州　山木悅心藏

國分開山南源性派禪師像　同禪師自賛　大阪　國分寺藏

福濟開法　黄檗第二代　木菴性瑫禪師像　同　禪師自賛　喜多元規筆

黄檗山　慈福院蔵

木菴禪師書
（三幅對）
長崎
福濟寺蔵



木菴性瑫禪師像　同禪師自賛　畫者未詳　豐前養德院藏

木菴禪師書　長崎杉山吉太郎藏

獨湛禪師自畫讃　黃檗山萬福寺藏

雪機禪師書　長崎横田渡舟藏

福済第二代　慈岳定琛禪師像　同　禪師自賛　喜多元規畫

長崎　福済寺藏

雪機禪師書題　長崎　横田波舟藏

慈岳禪師書

長崎　太田芳太郎藏

法林開山喝禪道和禪師像　同　禪師自賛　種信畫

黄檗山　雲光院藏

即非如一禪師像　同禪師自題　喜多元規筆　長崎崇福寺蔵

即非禪師書　長崎福濟寺蔵

即非禪師自書讃　尾州　山水悅心蔵

即非禪師像　同禪師自題　畫者未詳　豐州　養德院蔵

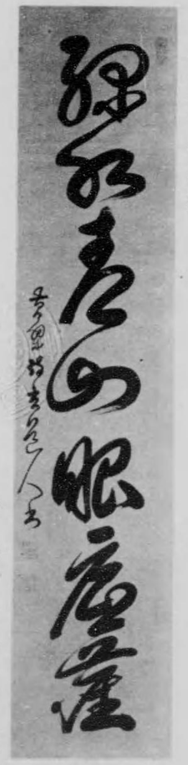
崇福第二代 黄檗第六代 千呆性俊禪師像　同 禪師自賛　喜多元規畫

長崎 崇福寺藏

若一炤元禪師書

門司 吉永雲堂藏

曉堂道収禪師書



下關 山縣孫一藏

濟貧鍋

諸圖は長崎市役所藏長崎名勝圖繪に現はる古圖にして崇福寺現存の巨鍋なり。延寶天和の飢饉に當り同寺四代千呆は福濟二代慈岳と前後して飢民の爲めに東西に勧進該鍋を鑄造施粥し一日に飢民を救ふ事此の巨鍋に依り實に五千五百餘人なりしと傳ふ

長崎 崇福寺藏

黄檗第五代 高泉性潡禪師像（右）

眞敬法親王御題讃　卓峰禪師書

黄檗山　萬福寺藏

高泉禪師書（上）

長崎　太田芳太郎藏

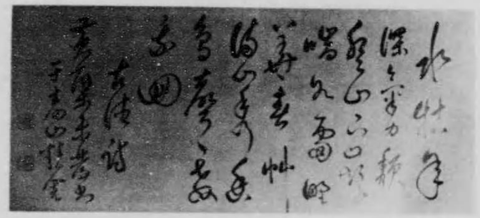
柏巖性節禪師像（左）

同　禪師自題　嘉多元規畫

門司　吉永雪堂藏

羅漢入定之圖（石）

柏岩禪師自畫讃　尾州　山本悅心藏

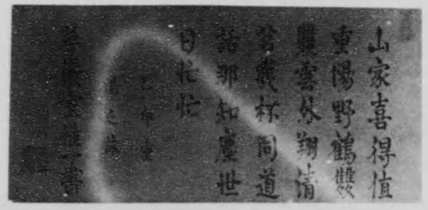


未發性中禪師書（上）

門司　吉永雪堂藏

惟一道實禪師書（下）

門司　吉永雪堂藏



興福第五代　黃檗第八代　悅峰道章禪師像

同　禪師自題　喜多元規畫　長崎　興福寺藏

興福第六代　雷音淨佩禪師像　悟峰禪師題讃　元珍畫

長崎　興福寺　藏

興福第七代　黃檗第十代　旭如蓮昉禪師像　圓通道成禪師題讃　畫者未詳

黃檗山　萬福寺　藏

興福第八代　黃檗第十二代　杲堂元昶禪師像　竺菴禪師題讃　畫者未詳

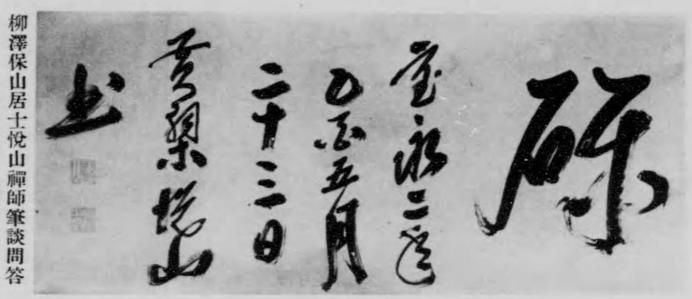
黃檗山　萬福寺　藏

興福第九代　黄檗第十三代　竺菴淨印禪師像

同　禪師自賛　元章書

長崎　興福寺　蔵

全透居士柳澤吉保、保山と號す大和郡山藩主なり深く黄檗宗に歸依し、殊に悅峯禪師と方外の交あり領内に永慶寺を創し禪師を請して開祖とす、また同門の諸禪師と往來す是卷は悅山禪師と筆談問答長卷中の一部なり居士の禪的見地を識らんとせば護法常應錄を閲見せらるべし



柳澤保山居士悅山禪師筆談問答

黄檗山　萬福寺　蔵

悅山禪師書（折本）　長崎　三浦寅道藏

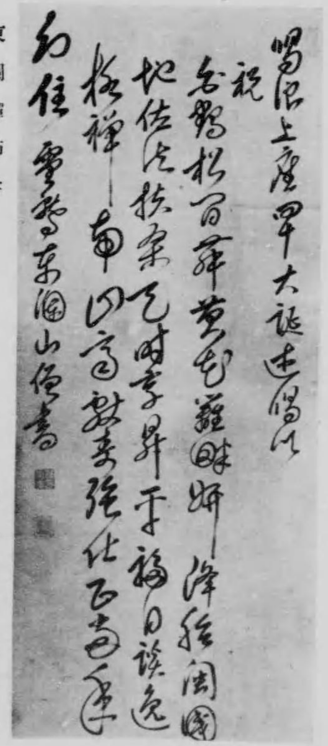
悅山禪師遺偈　黃檗山　慈福院藏

黃檗第七代　慈福開山　悅山道宗禪師像　同　禪師自題　喜多元規畫

黃檗山　慈福院藏

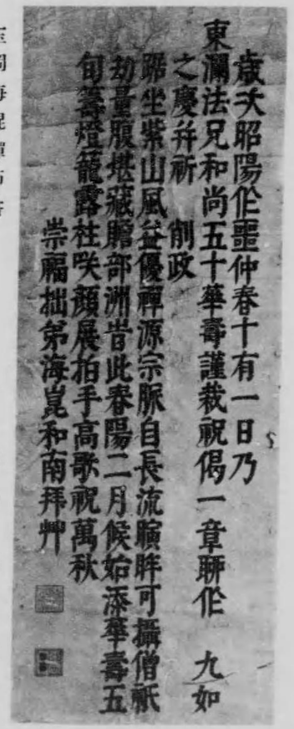
福濟第三代 靈鷲開山 東澗宗澤禪師像　同 禪師自題　喜多元規畫

長崎 福濟寺 藏



東澗禪師書

長崎 福濟寺 藏



歲次昭陽作噩仲春十有一日乃
東澗法兄和尚五十華壽謹裁祝偈一章聊作　九如
之慶幷祈　削政
跗坐紫山風益優禪源宗脈自長流瞎眸可攝僧祇
劫量腹堪藏鄧部洲皆此春陽二月候始添華壽五
旬籌燈籠露柱咲顏展拍手高歌祝萬秋
福弟海崑和南拜押

長崎 靈鷲庵 藏

玉岡海崐禪師書

福濟第五代　黃檗第十一代　獨文方炳禪師像

同　禪師自賛　畫者未詳

長崎　福濟寺藏

獨文禪師遺偈

長崎　福濟寺藏

獨文禪師書

門司　吉永雪堂藏

福濟第四代喝浪方淨禪師像

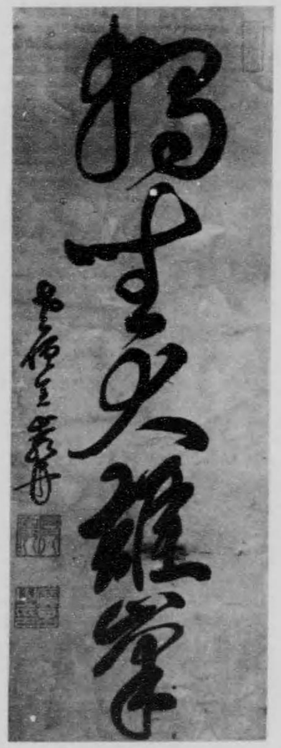
悅山禪師讃
小原慶山書

長崎 福濟寺藏

蘆葉達磨圖

喝浪禪師畫
千呆禪師讃

尼州 山本悅心藏



全巖禪師書

長崎 三浦實道藏

福濟第六代全巖廣昌禪師像

大鵬禪師讃
畫者未詳

長崎 福濟寺藏

福濟第七代 黃檗第十五及第十八代 大鵬正鯤禪師像

同 禪師自題 畫者未詳

長崎 福濟寺藏

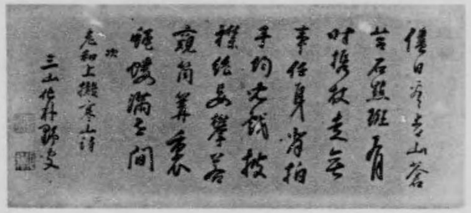
懸崖之竹 大鵬禪師自畫讃

長崎 福濟寺藏

竹之圖（右）

化林性悟禪師畫讃

尾州　山本悅心藏

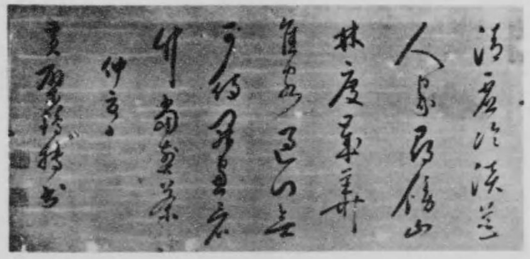


化林禪師書（上）

門司　吉永雪堂藏

鶴搏海天禪師書（下）

門司　吉永雪堂藏

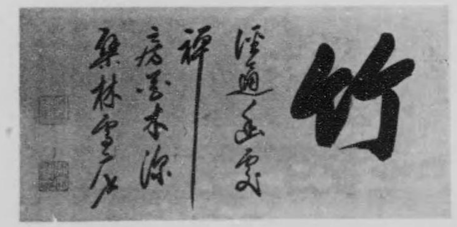


雪堂海瓊禪師書（左）

門司　吉永雪堂藏

國　雪堂禪師書　門司　吉永雪堂藏

雲　玉岡海崖禪師書　肥前　普明寺藏

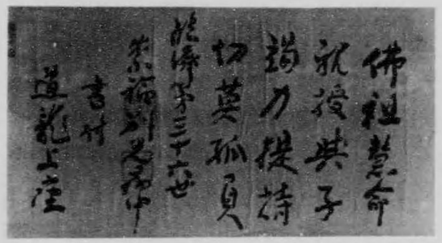


竹　雪广禪師書　肥前　普明寺藏

雪广海潤禪師像　同　禪師自賛　渡邊元眞畫　門司　吉永雪堂藏

露光量違いの為重複撮影

崇福寺七代大衲海權禪師像
同　禪師自題　畫者未詳
長崎　崇福寺藏



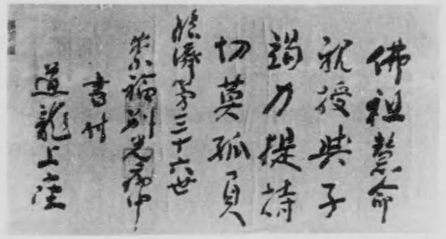
別光寂透禪師像　門司　吉永雪堂藏

靈源禪師書（左）長崎　崇福寺藏

黄檗第九代靈源海脉禪師像
同　禪師自題　元　眞書
長崎　崇福寺藏

露光量違いの為重複撮影

崇福第七代大衡海權禪師像
同　禪師自賛　畫者未詳
長崎　崇福寺蔵



別光寂透禪師像　門司　吉永雪堂蔵

霊源禪師書（左）長崎　崇福寺蔵

黄檗第九代霊源海脉禪師像
同　禪師自賛　元　凱畫
長崎　崇福寺蔵

義勝寂威禪師像

同　禪師自題　畫者未詳

長崎　崇福寺藏

伯珣照浩禪師像

大成禪師題讃　畫者未詳

長崎　崇福寺藏

大成照漢禪師像

同　禪師自題　畫者未詳

長崎　崇福寺藏

觀世音菩薩像

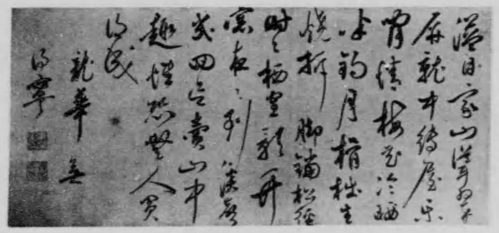
木菴禪師題　陳賢畫

長崎　高見和平藏

陳賢字は希三、太芝道人、又華山隱、天然子、碧水等の號あり明國東區の人なり出家して安南縣九日山延福寺に寓し佛畫を能くす、觀音圖は殊にその得意とする所なり示寂年月不詳

無得海寧禪師書

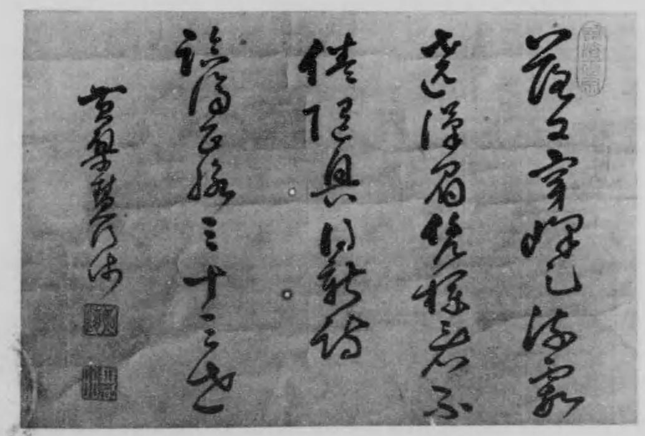
門司　吉永雪堂藏



無得禪師は閩の玉融の人出家の後密雲禪師に從ふて黃檗山に入り、後隱元禪師に參して印記を得、鳳棲萬安の諸寺に歷住し、福寧縣の龍華寺に進む明永曆十三年化す壽五拾四、實に隱元禪師の長嗣なり。

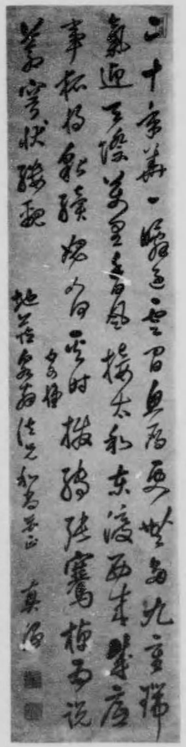
慧門如沛禪師書

門司　吉永雪堂藏



慧門禪師は福建泉州同安の人なり南安の報觀寺に出家し次で亘信禪師に見ふ又黃檗山に隱元禪師に謁し遂に印記を得たり獅子巖に居る、明の永曆八年隱元東渡の際黃檗山の後席を繼ぐ我が寛文元年隱元七十の大誕に逢ひ門人高泉曉堂等を遣はして祝壽の偈文を呈せしむ清の康熙三年十月化す壽五拾

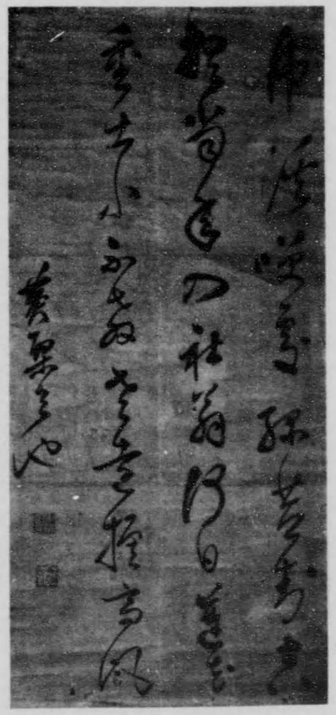
清斯眞淨禪師書



尾州　山本悅心藏

清斯禪師は慧門禪師の法嗣なり康熙十六年龍華寺より出て隱元禪師東渡後樂山第四代の席を繼げり。

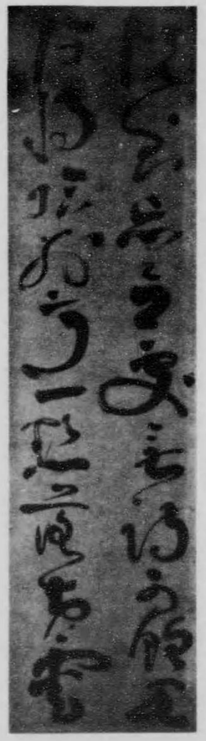
天地寂晨禪師書



尾州　山本悅心藏

天地禪師は慧門禪師の法嗣なり康熙二十年隱元禪師東渡後樂山第五代の席を繼げり

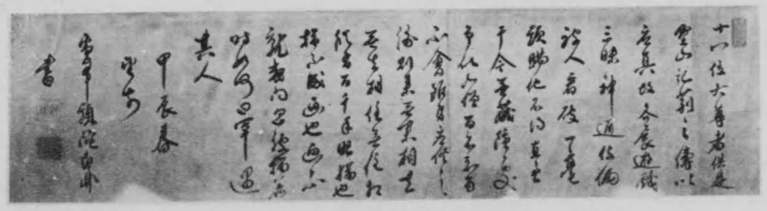
雲門禪師書（傳曰）



長崎　高見和平藏

隱元禪師題字及
木菴即非二禪師
之讃並に跋

菟爵道人の何人なるやを詳にし難きも
其畫は神氣飄逸、意態閑雅、蓋し其の
平生得力の深邃なるものありしを思は
しむ



長崎　小曾根均次郎藏

布袋之圖　隱元禪師賛　逸然禪師畫
長崎　渡邊渡舟藏

布袋之圖　隱元禪師賛　渡邊秀石畫
黃檗山　萬福寺藏

壽老人之圖　渡邊秀石畫
長崎　赤瀨保次藏

頴川藤左衛門木像

長崎　頴川喜代次藏

頴川氏本姓は陳、長崎に來りて譯士たり、慶安二年泉漳二州在留唐人等と謀り、蘊謙禪師を請待して福濟寺を重興し其の他同寺の爲め施設する處多し延寶四丙辰年八月沒す法名流光院殿道隆鏞盛老居士

兪惟和像

長崎　伊吹藏

兪惟和像居士は福建福州府福清縣の人我が元和八年東渡長崎に來り遂に籍を同地に置き河野氏の女を娶りて嫁さす寛永六年超然禪師渡來の際、魏、王、林諸氏と謀つて崇福寺を開創す延寶二年十二月沒壽七十有六

魏之琰肖像
千呆禪師題讃
畫者未詳
長崎
田口茂助藏

王心渠肖像
千呆禪師題讃
畫者未詳
長崎王定太郎藏

吳一官像
木菴禪師題讃
畫者未詳
長崎吳榮一藏

林道榮像　長崎　官梅雅一藏

居士字は歓雲蘆山又は墨痴と號し唐大通事に進む夙に洛閩の學を修め性理に通じ詩は構思を要せず書は入神の域ありて聲名天下に高く當時高玄岱と併稱して長崎の二妙と云ふ常に即非禪師に參叩し法の玄微を得たり昔て長崎奉行妻木氏に從ふて江戸にあり儒名一時に高かりき長崎奉行牛込氏また其の才を愛し劉宣義と共に屢引て賓客となし賓坐の双龍と呼び壯少陵の句東閣官梅を分ち與ふ是より官梅を號とす資永五年十月二十二日沒す壽六十有九。

奉祝
分紫胡山謹爲大師
家
桑蓮開士紫雲爲編
勒分身降日東義燦
寶池威道果個道覺
苑題家風華宵金
鳳示禪鮮峰蹟泥牛
燈燈空本衆雖携
兜率茶美顏休著道
山中
長崎林道榮拜

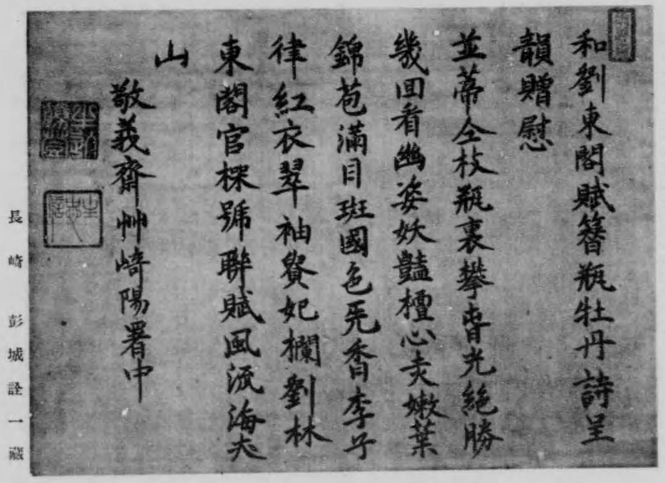
林道榮書（上）　長崎　福濟寺藏

劉宣義書（下）　長崎　福濟寺藏

彭城宣義肖像　千呆禪師賛　畫者未詳

長崎　彭城詮一藏

長崎奉行牛込忠左衛門宣義に贈る詩



和劉東閣賦簪瓶牡丹詩呈
韻贈慰
並蒂全枝瓶裏攀春光絶勝
幾回看幽姿妖豔檀心夫嫩葉
錦苞滿目斑國色兎香李子
律紅衣翠袖貧妃欄劉林
東閣官梁鴈聯賦風流海大
山
敬義齊艸崎陽署中

長崎　彭城詮一藏

彭城宣義唐姓は劉字は繼智通稱仁左衛門東閣と號す父は明の歸化人なり天資明敏少時神童を以て稱せらる最も支那語を能くし方言土語通曉せざるなし歳十八唐通事に拔擢せらる其の學識洛な主さす而も之を固執せず隱元禪師の渡來せし時宣義年二十一常に左右に侍して飜譯通事流るるが如く失舞水、獨立等にも敬重せられ林道榮と並んで長崎の二大家として名聲天下に布けり元祿八年九月廿一日歿す年六拾參上の詩にて牛込奉行信任の度を察すべし

跋

分紫山福濟寺は長崎に於ける否我が國に於ける檗門の名刹なり。試みに歩を其の境内に移せば、峯巒聳秀する處彩棟華梁は雲瑞に接し、僧房香積は峭壁に倚り、巍然として街衢を壓す。眞に崎陽の一偉觀として江湖に喧傳せらるゝ所以なり。

寛永戊辰唐僧覺悔此の地に揷艸し、慶安己丑温陵謙禪師錫を茲山に卓めて諸寶殿を圓成し、明暦乙末象山木禪師東來開法祝國せし以來、法幢隆々、法脉浸々、伽藍の精粹は法門の隆昌と相待ち、海西の一大法窟として四方の瞻仰する所なりき。

然るに、明治維新前後より支那貿易の衰退に伴ひ、寺勢大に衰へ纔に餘喘を保ちて舊觀を維持するに過ぎず、近時寶殿客廳齋堂等次第に朽頽して頗る危險の狀態に頻し、今昔の感轉々禁ずる能はざるものありき。

大正九年七月、現董實道行和尚澄職に際し、先人啓創の艱辛と、歴代守成の不易とを思ひ、粉骨以て報うる所あらんとし、直ちに其の復興を計りて江湖に南北し、樹下石上枕粥安んぜず、淨財を内外遠近の有縁に募り、今年大正十二年に至り鼎新の工寖く成り、乃ち舊觀に復し以て一念爲善の果を得たり。宗門の法喜和尚の禪悅知るべきなり、即ち恰も重興謙禪師二百五十年の祥當なるを以て、開創參百年を兼ね大遠忌法要を嚴修し、且渡來唐僧肖像展覽會を併催し一は以て寺觀の復舊を自祝し、一は以て開山及び諸先大德の法恩に鳴謝せり。經費實に二萬餘圓、檀信僅に貳拾戸に滿たざる當寺にしては實に奇蹟に屬す、公の法德と信望とが能く佛天に靈感し衆望を荷負するにあらずんば焉ぞ能く茲に至るを得んや。

道公が渡來唐僧肖像を普く全國の諸刹に請ひて大展觀を開催せし趣旨は、擧げて公の經過報告中に在れば今茲に贅せず、今や黄檗寺院の全國に散布するも

の六百餘、其の開基中過半は此等渡來諸禪師ならざるはなく、諸禪師は黃檗の法乳と支那文化とを以て我が國現時の文明を釀成せしめしもの、本册子は實に此等の諸禪師、諸居士肖像及び筆蹟を網羅し、添ふるに檗門の逸史雪堂居士の筆になれる黃檗渡來史を以てせしものにて、宛然たる我が國の黃檗史にして又支那文明東漸史なり。

然れば本書の刊行は、黃檗之玄風を江湖に宜揚し紹介せしのみならず、我が佛教史界は勿論、汎く史學界の一權威を加へたるものにして、斯界の最勝珍寶たるを失はざるべし。

余幼にして長瀧山主確志眞石和尙に養はる、時に道公年齡甫めて五歲亦和尙の膝前に在りしが、余朞月はならずして生家に歸り、爾來杳として音信を絕つもの參拾餘年公分紫山を董するに迨び舊情を溫め往來朝夕を絕たず、余は公が傳法の大勇猛精進と肯構の志篤きとに感ず、更に公が欠乏に近き私財を抛ち囊槖を倒にして本書を刊行するに至りし道念の特殊なるを感謝に堪にす、余は展覽會開催を公に慫慂し且本書の編纂、出版に關與せし緣因に依り、玆に顚末の概略を叙し以て跋とす、願くば福濟共に無窮ならんことを。

大正十二年十月

長崎市役所市史編修室に於て此の記を作る。

鶴城　福田忠昭

附 英製海軍史

黄檗僧の渡來に就て

門司　吉永雪堂

緒言

我國は常に、大陸文化の變遷と、その刺戟とによりて、大なる影響を受けて來たが、内にも緇流の徒によりて、將來されたものが少くない、德川時代に於ける、黄檗宗の傳來もまたその一である、黄檗宗の傳來には、種々の原因もあらうが、吉利支丹禁壓のため、往來外人に對して、宗教的取締が嚴密と成つた事海外交通の門戸が、長崎に限定されたため、唐船唐人等の、此地に往來居留するもの、漸くその數を增した事等より、支那客商等の間に、往々同宗徒の交り居るの風聞ありて、屢々その筋の鞠問する所と成り、貿易上の不利を蒙ることが少からざりし爲め、相議して、各々出身地の名によりて歸依寺を定め、宗徒の有無を檢査し、併せて海上の安瀾、先亡の冥福を祈るの道場として、その筋の允許を得、唐寺を開創したことが、主因であるらしい。

唐寺の開創に伴ふて、第一に起る問題は、その主持者で、一面鄕人教化の便宜よりして、その人を各自の鄕國に求め、是より唐僧の去來を見るに至り、更に進んで、長崎以外の地に於ても、教化を敷くの機運を促進し、遂に獨立せる一宗教團たる、黄檗宗の流通を見るに至つたが、私は今黄檗僧渡來につきて述べんとするに當り檗僧渡來前に渡來せる者をも一括し、從つて其の往來歸化を左の三期に分ちて說きたいと思ふ。

第一期　隱元渡來前　自元和元年至承應二年　參拾九年間

第二期　隱元の渡來と之に附隨するもの　自承應三年至明曆三年　四年間

第三期　隱元渡來後　自萬治元年至享保七年　六拾五年間

第一期　隱元渡來前

本期に屬する者の大部分は、純然たる黄檗僧としては叙說し難いが、後日檗僧等が渡來の素地とも云ふべき、唐寺の創設及び諸州に散在せる、侯伯士商等の

支那趣味に憧憬せるものゝこの關係を開きて、他日の成功を容易ならしめたる等黄檗流通の先容を成したかの觀がある。

私の知る處で、此頃最も早く我が國に渡來せる支那僧は、後水尾帝の元和元年（明神宗萬曆四十三年）浙江寧波府天童山の書記智光であつた、光は長崎正覺寺に滯在し、數年の後示寂したゝあるも、その法系並に行狀を詳かにし難い、光と同年に、江西饒州府浮梁縣の人劉覺と云ふものが、商賈として渡來したが、後故ありて剃髮し、眞圓と號し、同九年同鄕の在留商人、歐陽華宇の別墅に就いて、小菴を結び淨業を修した、此の地が後の東明山興福寺（俗に南京寺と云ふ）で、三江地方渡來者の歸依寺として、長崎に於ける、唐寺開創の始をなしたのである、隱元の渡來に先つ〻實に三十一年前であつた、同寺第五代悅峰の記する處によると、東明山始粗眞圓とある、慶安元年十二月十一日化す壽七十歲。

寛永五年には、福建泉州府の僧覺悔が了然、覺意の二侍僧を從へて渡來し、泉漳二州地方渡來者の歸依寺として、分紫山福濟寺（一名漳州寺）を開創し、住持十年、同十四年六月二日化し、了然が看坊となつた、覺意は正保四年に了然は慶安二年に化した。

覺悔等についで、翌六年、福建福州府の僧超然渡來し、福州、東京地方渡來者の歸依寺として、聖壽山崇福寺（一名福州寺）を開創し、住持十六年、正保元年九月八日化す、壽七十八歲、寛永十六年に、同じく福州の僧普定、水月の二人、超然を慕ふて渡來し、普定は超然の化後看坊一ケ年、降て明曆元年に回棹し、水月は同年に化した。

如上の三ケ寺を、三福寺と呼んだものだが、先是興福寺にては、寛永九年、默子如定の渡來によりて、寺基漸く鞏固と成つた、默子は江西建昌府の產、江蘇に轉じ楊州の興福禪院に於て禪生活に入つた人て、三福寺も是迄は、纔かに渡來人の爲め、媽姐廟に奉仕するの外、同鄕先亡の追福供養を營むに過ぎず、從つて住僧等も何等學識の見るべきものもなかつた樣だが、默子に至りては、明版大藏經を所藏して居たと云ふから、此一事によりても、その人の用意を概推するに足る、或は長崎を通じて、日本に移入された大藏經は、是が最初のものであつたかとも思はる、同十一年には、酒屋町と磨屋町との間に、長崎石橋の濫觴と云はれた眼鏡橋を架設して往來に便にしたが、象鉗細工も、默子の所傳と云ふことである、明曆三年十一月三十日化す壽六十一歲。默子は餘程博識多才の人で、京阪その他の地方より、新らしき何物かを傳へんが爲めに、興福寺を訪ひ、或は就て大藏の閲覽などをした人々があつた。

に轉じ楊州の興福禪院に於て禪生活に入つた人で、三福寺も是迄は、纔かに渡來人の爲め、媽姐廟に奉仕するの外、同鄉先亡の追福供養を營むに過ぎず、從つて住僧等も何等學識の見るべきものもなかつた樣だが、默子に至りては、明版大藏經を所藏して居たと云ふから、此一事によりても、その人の用意を概推するに足る、或は長崎を通じて、日本に移入された大藏經は、是が最初のものであつたかとも思はる、同十一年には、酒屋町と磨屋町との間に、長崎石橋の濫觴と云はれた眼鏡橋を架設して往來に便にしたが、象鉗細工も、默子の所傳と云ふことである、明曆三年十一月三十日化す壽六十一歲。默子は餘程博識多才の人で、京阪その他の地方より、新らしき何物かを傳へんが爲めに、興福寺を訪ひ、或は就て大藏の閲覽などをした人々があつた。

正保元年には、浙江杭州府仁和縣の僧、逸然性融渡來して興福寺に入り、翌年默子退隱後を承けて住持となつた、逸然は漢畵を傳へたので、その門下には秀石、若芝等の如き逸才を打出し、當時畵壇の一方にその名聲を響耀した。

此の頃福州支提山の僧、恒修と云ふもの、渡來して逸然の會裡にあり、會々崇福寺檀越等の依賴を受けて、その法友にあたる、隱元門下の逸足也嬾性圭を推擧し、渡來せしめんとしたが、不幸にして、也嬾は厦門港口に溺寂し、そのて所願を果たさなかつたけれど、是が後日、隱元渡來の動機を作つたものである

逸然の一生中、最も光輝ある頁は隱元請待の事であるが、是は後段に述べよう

逸然の身に取りても、餘程得意としたものらしく、請法東傳の四字をその使用の印章中に見ることである、寛文八年七月十四日化す、壽六十八歲、塔は興福寺にもあるが、隱元はその請法の功を追嘉して、黃檗山にも立塔記念せしめたものである。

正保三年には、福州の僧百拙如理渡來して崇福寺に入り、慶安二年には、淨達覺聞の二僧、その後を慕ひ來りて大に寺門の經營に盡した、百拙は慶安二年四月十八日に化し、淨達、覺聞等輪番監守したが、明曆元年共に回棹した。

慶安二年五月には、泉州安平の產で、開元寺出身の、蘊謙戒琬渡來して福濟寺に入り、檀越潁川氏等と謀り、大に寺門の經營に力を注ぎ、媽姐廟は一躍して堂々たる大伽藍と成り、中興開山と稱せられた、延寶元年六月二十三日化す、壽六十四歲。著述分紫山適茲草、唱酬述懷あり。

蘊謙渡來の翌慶安三年には、興化府莆田縣の產、漳州南院山出身の道者超元が渡來して、崇福寺に住した、道者の師亘信は、徑山費隱の法を嗣いだ人で、隱元の法弟に當るから、者と隱元とは、法の上では叔姪の間柄である、此人の渡來は、當時寂寞を極めた、我國の禪界に向つて擲たれた光明彈とも云ふべく、諸州の龍象風を聞いて西下して、崇福寺の門に集り、南山の妙諦を齎らし去つ

て、諸方に化城を立てたものが少くなかつた、而して是迄の渡來僧は、足一たびも長崎の地を出でなかつたが、者は松浦侯に招かれて、平戸に行化し、その地に於ても大に崇敬を受けたものである、萬治二年回棹し、清の康熙元年八月廿六日、興化府國觀寺に於て化した、著述南山道者語錄があり。

承應二年六月には、浙江杭州府錢塘縣の僧、澄一道亮が渡來して興福寺に入り明曆二年に同寺四代の席を繼いだ、澄と同鄕の洞門の僧で後水戸侯に聘せられた、心越興儔は、實に此人を賴つて渡來したもので、澄は醫術の心得も深かつたから、治を門に求むるものも少くなかつたと云ふことである、元祿四年四月八日化す、壽八十四歲。

承應二年、杭州仁和縣の儒醫戴曼公が渡來した、翌年臘八の日隱元に謁して剃髮し、獨立性易と號し、書記を領して、隱元の東土に隨行し、江戸にて松平信綱に留められたけれど、脚病の爲め西下し、癒ゆるの後、筑、豊、防の諸州に轉々して、得意の醫儒詩書を以て奇才を發揮し大に歸向されたが、寛文十二年十一月六日長崎に化した、壽七十七歲。著述家祿三十卷(原稿燒失せしと云ふ)一峯雙咏集、有樵別緒記等あり。崇福寺にては、道者の住院中、承應三年、徑山門下の勇僧融宗と云ふものが、道者が黃吻を以て法を日本に賣弄するものと成し、商船に便乘し來り、七首を懷中に藏して、者を崇福の丈室に訪ひ、論難徵詰したが、親しく者の行履を視るに及んで、大に之に推服し、稱贊して回棹したと云ふことである。

要之、本期に於ては、默子、逸然、澄一、獨立、蘊謙、道者の外は殆んど品藻の限りでないが、而し一面から見て、彼等が創設住持した唐寺が後日日支兩黃檗の中繼と成つたと云ふ點に研究の價値を感ずるものである。

第二期　隱元の渡來と之に附隨するもの

本期に屬するものは純然たる黃檗僧と云ふべきものである、慶安四年崇福寺より招請せし也嬾性圭が、厦門港口に溺寂して東渡を果さなかつたことは、既に述べて置いたが、その報が長崎に傳つたので、推擧者恒修は痛感やまず、寺主逸然の室に入つて九拜跪白して云はく、也嬾東來之緣中綴幸其師隱元老人現在

本期に屬するものは純然たる黃檗僧と云ふべきものである、慶安四年崇福寺より招請せし也嬾性圭が、厦門港口に溺寂して東渡を果さなかつたことは、既に述べて置いたが、その報が長崎に傳つたので、推擧者恒修は痛感やまず、寺主逸然の室に入つて九拜跪白して云はく、也嬾東來之緣中綴幸其師隱元老人現在黃檗顯寺主具書幣迎請燈傳東因寺主弘功大願國國欽仰と、逸然之に感動し、當時の長崎通事及び在留の諸檀護等に謀りて同意を得、愈々隱元招待の請啓を發することと成つたが、その動機は實に恒修の發促せし所である。

そこで我承應元年四月六日、逸然自署の請啓一通及大通事潁川官兵衛、林仁兵衛、潁川藤左衛門、渤海久兵衛、彭城太兵衛並に在留唐人張立賢、何懋齡、許鼎、程國祥、高應科、王引、何高材、陳明德等十三人連署の請啓一通とを併せ、船主何素如と云ふものに托して、黃檗山に送呈し、隱元の東渡敎化を懇請した、之に對して同年七月六日を以て隱元は答書を作つて之に答へ、老齡遠に應じ難しとて、語錄等を送つて辭退して居るが、此書底に潛む深意を洞察する時は、無下に之を拒絕せしものとは見へない、此等前後に亘る事は、當時彼我の國情境涯等より、仔細に詮索すべきものであるが、此小篇中にはそれらには觸れまい、此の年六月隱元の徒木菴は、その徒靈叟と云ふものを長崎に遣し、福濟寺住持たる法弟蘊謙の下に滯留し、日本の事情を調査せしめて居るが、是は隱元請待の內意を、別に蘊謙より木菴に傳へ來つたによるものと見へる、隱元の答書二通が長崎に着して逸然等に交付さるゝや、一度は之を悲しんだが、如何にもして、その初一念を貫徹せんと欲し、その答書の旨に探順して一歩を進め、承應元年八月、何素如に托して、第二請啓を發送したが、添附の路費と共に不幸にして海賊に掠め去られた、而し逸然等の熱誠は是が爲め却つて一層の鞏固を加へ、承應二年三月前來の事情を具陳して、第三請啓を作り僧自恕に托して黃山に送つた、此請啓に接して隱元の心は大に動いたけれど、まだ決答を與ふるには至らなかつたが、門下の良者を日本に遣はして、事情を視せしむることと成つたのは、此の事に就いて、一段の進捗を見た譯である。

第三請啓に對する答書を手にした逸然等は、因緣の未到を嘆いたが、更に一段の勇氣を鼓舞し重ねて諸檀護と議し、自署の第四請啓一通及び檀越潁川官兵衛渤海久兵衛、彭城太兵衛、張立賢、程國祥、高應科、陳明德等連署の請啓一通とを併せ、承應二年八月、僧古石を遣はして黃山に至り、隱元に謁して東來敎化

を懇願したが、此時先に木菴からも遣はした靈叟、後に隱元から遣はした良者等も檗山に歸來して、日本の事情も明瞭となつた爲め、玆に愈々應請の意を決して、上堂の上之を允諾し、數年に亘る懸案も首尾圓成するに至つたのである。そこで隱元は諸般の準備を整へ、檗山の後席を法子慧門に讓り、明の永曆八年我が承應三年五月十日辭衆上堂あり、檗山を發錫し、六月三日厦門に入り、廿一日諸檀護法眷門人等に留別し、鄭氏の兵船に護送され風帆恙なく、七月五日長崎に着し、翌日興福寺に進山した。

隨侍渡來せるものに獨言、獨知、獨湛、獨吼、大眉、良演、無上、惟一、良哉、良靜、良健、誠善、宗範、惟聽、惟滿、元福、雪機等がある。

此内獨言、獨知、大眉、獨湛、良演、獨吼を除き、翌年正月良哉は隱元安着の報及び日本に於ける今後の豫想等を齎して、本師費隱の下へ、無上、惟一等は門人卽非を召すべく、雪機はもと木菴からその代理として隨侍せしめたものであつたが、此時木菴を召すべき使命の下に、その餘のものも漸次に回棹の途に上つた。

請法使古石は歸來の後、翌年徑山に登つた事が嚴拭の著述中にあるのを見れば良哉と同道出發したものらしく、又卽非の過東明山悼言石二兄の詩あるに見れば、再度歸來し、間もなく興福寺にて終つたものらしいが、示寂の年月等を詳かにし難い。

此年五月隱元は崇福寺に進山し、似乎債父還也と云つて、往年也嬾の應請を果さなかつた宿債を償還するの意を寓した、而して隱元の聲光は早くも、上國に傳播し、妙心派の耆舊龍溪、禿翁等相議して、その教化を請ひ、八月には攝州富田村の龍溪の住院地普門寺に入り、次で萬治三年九月江戸に下りて將軍に謁見し、寛文元年山城國宇治に地を賜ふて、黄檗山萬福寺を開創して開山と成り、大に教化をあげたが、同四年松隱堂に退休し、延寶元年四月三日八十二歳を以て化した、嗣法門人二十三人、内十三人東渡せず、又三人は日本人であつた、著述黄檗語錄、又錄以下三十餘部あり。

隱元に隨侍して渡來歸化せし門人の事を玆に簡叙しやう。

獨言性聞は興化府莆田縣の產で長崎にあつて師の法化を補けたが、翌明曆元年七月二十七日興福寺に化した、壽七十歲。著述獨言詩集あり

獨知後に慧林性機と云ひ、福州府福清縣の產で元の東上に侍し、次で攝州富田に佛日寺を開き、後黄檗山第三代の席に上つた、天和元年十一月十一日化す、

に議見し、寛文元年山城國宇治に地を賜ふて、黄檗山萬福寺を開創して開山と成り、大に教化をあげたが、同四年松隱堂に退休し、延寶元年四月三日八十二歳を以て化した、嗣法門人二十三人、内十三人東渡せず、又三人は日本人であつた、著述黄檗語錄、又錄以下三十餘部あり。

隱元に隨侍して渡來歸化せし門人の事を玆に簡叙しやう。

獨言性聞は興化府莆田縣の産で長崎にあつて師の法化を補けたが、靈明曆元年

七月二十七日興福寺に化した、壽七十歳。著述獨言詩集あり

獨知後に慧林性機と云ひ、福州府福清縣の産で元の東土に侍し、次で攝州富田に佛日寺を開き、後黄檗山第三代の席に上つた、天和元年十一月十一日化す、壽七十三歳、嗣法門人別傳以下若干人、著述佛日語錄、滄浪聲等あり。

獨湛性瑩は興化府莆田縣の産で、元の東土に侍し次で遠州に寶林寺を開き、後黄檗山第四代の席に上つた、寶永三年正月廿六日化す、壽七十九歳、嗣法門人圓通以下三十餘人著述獨湛語錄、梧山舊稿以下數部あり。

大眉性善初め良者と號す、泉州府晋江の産で元の東土に侍し、檗山監院の職を領したが、後東林院を山内に開きて退休し、延寶元年十月十八日化す、壽五十九歳。嗣法門人梅嶺、著述東林夢語あり。

良演後に南源性派と云ふ福州府福清縣の産で元の東土に侍し、後大阪に國分寺を中興したが、元祿五年六月廿五日化す、壽六十二歳。嗣法門人覺峰以下若干人著述芝林集其の他數部あり。

獨吼性獅は福州府の産で元の東土に侍し、後に檗山に漢松院を開いたが、元祿元年十一月十六日化す、壽六十五歳。嗣法門人翠岩以下若干人、著述に五雲集あり。

恒修後に無心性覺又は無門或は玉山と云ふ、元の東土に侍し、後檗山の監院を領したが、聲梵、瑜珈に精通し、山規の編制にその蘊蓄を傾けた、寛文十一年正月廿一日化す、壽五十九歳。

此等門人の手闢せる寺菴は、上述の外諸處にあつたが、今は繁を避けて記述すまい、而してその法子法孫等が得法の後、諸州に行化して開創せる寺庵教化せる二衆は相應に多數に上り、種々の意味から地方文化の開發に貢献した點は少くなかつたものである。

明暦元年七月、木菴性瑫は、隱元に召されて渡來し、一旦福濟寺に入り、次で隱元の後を追ふて攝州に上り、黄檗山の開創に力を協せ、寛文四年隱元の後を承け、第二代の席に上り、條規綿密大綱次第に整備して一山の基礎正に鞏く、傍ら諸州に行化して法化をあげた、貞享元年正月二十日化す、壽七十四歳。

嗣法門人鐵牛、慧極、潮音、以下四十餘人、著述に木菴語錄、紫雲止草以下

十餘部あり。

菴に侍して再渡せし雪機は、一旦攝州に上つたが、後長崎に歸り、寛文元年回棹した。同じく喝禪は菴に從ふて轉々し、後城州に善福寺を開いたが、寶永四年十二月十三日化す、壽七十四歳。著述に喝禪詩集あり。同じく慈岳は福濟寺に留りて、法叔蘊謙の法化を補け、その後を繼いだが、元祿二年正月十二日化す、壽五十三。著述に永聖禪居草あり、此他同渡のもの十餘人あるけれども何れも回棹して了つた。

明暦二年には、先に回棹せし無上性尊が、惟仁と同伴し、張一試の兵船に便乘して再渡し、攝州普門寺に至り隱元に謁して唐黃檗の門人、護法等の書を齎らし、故土に歸錫せられんことを乞ふたが、龍溪の江戸より歸りて懇留するによりて止んだ、惟仁は間もなく回棹したが、無上は越ゑて萬治三年五月十六日普門寺に化した、壽三十歳。著述竹岩集あり。

明暦三年二月卽非如一が隱元に召されて渡來し、崇福寺に入つた、當時法兄木菴もまた長崎に居たので、相並んで法化をあげ、時人稱して隱元門下の二甘露門と呼んだ、寛文四年檗山に隱元を省覲し、翌年西下の途上、小倉侯と法緣喫合し、同五年同地に福聚寺を開創し、數年の後長崎に回り、同十一年五月二十日化した、壽五十六歳。嗣法門人法雲以下若干人。著述卽非語錄以下數部あり。卽に侍して渡來した、曇瑞後に千呆性俊と云ふ、從ふて轉々し、長崎にありて延寶の飢歳に逢ひ、大釜を鑄、粥を作つて飢民に施す、其後檗山第六代の席に上つたが、寶永二年二月朔日石峰寺に化した、壽七十歳。著述千呆語錄其他あり。同じく若一炤元は費隱の隱元を召還するの書を齎らして同渡したが、書は隱元の下に屆けられたけれど、事によりて機を遲らされ、萬治二年に回棹した、同じく弘永性嘉も從つて崇福寺に入つたが、寛文元年葬親の爲め回棹した。

木、卽兩人の渡來は、隱元の後であるが、何れもその法を補けしめんが爲め召致されたものであるから、茲には便宜上第二期の中に入れて置いた。

第三期　隱元渡來後

化府吉陽の產）に命じて東渡せしめた、此の時往年回棹した、惟一道實と柏岩性節並に費隱の法孫未發性中等同渡し當寺に入つた、高、曉の二人は間もなく檗山に登つて壽章を捧呈し、遂に此の土に留つた、高は後岩代に下つて東北の敎化に第一指を染めたが間もなく檗山に歸り、城攝の方面に化網を張り金枝玉葉の御歸依淺からず、元祿五年正月檗山第五代の席に上り、同八年十月十六日化す、壽六十三歲。嗣法門人若干人著述に高泉語錄、洗雲集以下數十部あり。

曉堂は檗山に書記を領し、又獨湛の法化を遠州に扶けたが、寛文六年正月廿八日檗山で化した、壽三十三歲。著述夢遊漫錄あり。

惟一は福州府侯官縣の產、檗山に上つて隱元に謁し山內の双鶴亭に閒居し元の法化を扶くるの傍先亡の双親妻子追薦の爲め多くの經典を血書したものだが、元祿五年三月十三日化す、壽七十三歲。著述幻居草あり。

柏巖は漳州府漳浦縣の產、渡來の後卽非の門に列し、從ふて諸方に轉々し、化後檗山に上りて隱元の侍室に入つたが、延寶元年八月十九日化す、壽四十歲。著述聽月集、叢林典則等あり。

未發の渡來は、一時小波瀾を起したと云ふのは、此の頃隱元門下の直系でなければ入國を許可せぬことに成つて居たので、原船の回棹を待つて故國に歸らしめられた。

延寶二年福州府福淸縣の玉岡海昆渡來し、翌年第六代の席を繼いだ、元祿六年十月六日化す、壽五十二歲。（或は五十三）嗣法門人若干人。

玉岡と同時に渡來した泉州府同安縣の雪堂海瓊は、延寶四年より看坊二年、後四國に行化したが、貞享三年二月十六日化す、壽三十五歲。

延寶五年に渡來した江蘇蘇州府常熟の雪广海潤は始め興福寺に入つたが、後千呆の門に轉じ、長崎に祇樹林を開き、四國に行化して松山の千秋寺を董し海南に法化を擧げたが、寶永五年閏正月六日化す、壽六十歲。嗣法門人若干人その著述に雪广詩集あり。

元祿六年七月福州府福淸縣（一に興化府莆田縣）の大衡海權が、福州府連江縣の靈源海脉と共に渡來し。衡は同年第七代の席を繼ぎ一旦退休し。同九年再住

した。正德五年十二月廿八日化す、壽六十五歲。嗣法門人若干人著述大衡語錄及び唱和集あり。

源は同寺に看坊一年の後退休し、享保元年八月檗山第九代の席に上り、當寺を兼務した。同二年五月十八日化す、壽六十七歲。(一に六十六)嗣法門人若干人。

寶永六年五月には延平府尤溪縣の別光寂透義勝寂威の二人渡來し、光は寶永六年第八代の席を繼いだが、同七年十一月二十八日化す壽三十七歲嗣法門人若干人。

勝は正德元年第九代の席を繼いだが、享保元年八月六日化す壽五十二歲。

享保四年六月福州府福清縣の道本寂傳渡來し、第十代の席を繼いだが、同十六年十二月廿六日化す、壽六十八歲。嗣法門人若干人著述東遊草あり。

享保七年七月延平府尤溪縣の伯珣照浩、大成照漢の二人渡來し、珣は同九年第十一代の席を繼ぎ、明和三年九月檗山第二十代の席に上つたが、安永五年十月二十三日化す、壽八十二歲。嗣法門人若干人著述に東遊草あり。

成は安永七年十一月檗山第二十一代の席に上り、同五年當寺を兼務したが、天明四年二月十日化す、壽七十五歲。嗣法門人若干人著述間居七吟等あり。

此等の外寬文九年支那黃檗山の虛白より謝法使良悟、牧休の二人長崎を經て黃檗山に上り同年各回棹した、元祿六年渡來一時大浦の林氏に寄錫して病を養ふたが間もなく回棹した超鼎、同年渡來せしも上陸不許可と成りて回棹を餘儀なくされた彝菴、及び中途海上に溺寂した希聲、支那黃檗山主廣超の下より渡來した、蘊陀を始め去就未詳の僧等が若干ある、又黃檗の開創に伴ふて佛工、畫工等の渡來したもの等があり、日、支兩黃檗間の交通書簡には厦門に來つて、船便を待ち乍ら、船室狹隘のため徒らに東天を望んで素志を達する事が出來なかつた者もあつた、又檗山及び長崎三寺後住の爲めに請待せられたが種々の事情に碍へられて渡來不能と成りたるものに仲琪、一葦等をはじめ若干人がある更に是等に附隨して演ぜられたる檗僧を背景とせる兩國交通に關するものや、檗僧渡來後諸州に行化したる敎蹟等も附記し度いが、紙數に限りある附錄的の此の篇では到底その詳細を述べ難いから筆を此處に擱くことゝする。

更に是等に附隨して演ぜられたる檗僧を背景とせる兩國交通に關するものや、檗僧渡來後諸州に行化したる敎蹟等も附記し度いが、紙數に限りある附錄的の此の篇では到底その詳細を述べ難いから筆を此處に擱くことゝする。

大正十三年六月二十日印刷
大正十三年六月二十三日發行

長崎市下筑後町八一番地
編者兼發行者　三浦實道

長崎市榎津町七番地
印刷者　藤木喜平

長崎市榎津町七八番地
印刷所　藤木博英社
電話一、五二八番 一、七〇三番

長崎市下筑後町
發行所　福濟寺

不許複製

終